1　あえて過去形で語りたい。かつて「他我問題」という問題があった。また、「外界問題」という問題があった。そして無理を承知で現在形で語りたい。「今はない。」と。「他我」も「外界」も聞き慣れない言葉だろう。「他我」は「自我」と対になる。つまり、私に自我があるように、他人にも他人なりの自我があるだろう。それを私の視点から「他人の自我」つまり「他我」と呼ぶ。それが、哲学問題になる。「外界」はもっとみょうちきりんな言葉である。なんだそれ。「外の世界」。反対は「内の世界」だから、「内界」だろうか。ますます「なんだそれ。」である。

2　今、私の前の机の上に、コーヒーカップがある。これは外界のものだといわれる。で、私はコーヒーを、こう、一口飲む。コーヒーは喉を通ってたぶん胃の方に入っていく。この、体の中に収まったコーヒーは、じゃあ「内の世界」なのかといえば、そうではない。「内と外」というのは皮膚の内と外ではなく、「心の内と外」なのである。机の上にあろうが、胃の中にあろうが、それは外界のものとされる。

3　では、内界はどこにあるのか。コーヒーを味わった。その苦みがまだ残っている。その感覚。それが、内側の世界だ。なぜ「内側」なのか。それを自覚するには他人のまなざしが必要となる。そこにコーヒーカップがあること、それは他人にも分かる。胃の中に入ったコーヒーも、胃を開いてみれば他人にもそれは分かるだろう。しかし、私が味わっているこの感覚、これは他人には分からない。だから、内側の世界といわれる。

4　つまり、「心の内」とは「意識」のことなのである。私はさまざまなことを意識している。コーヒーの苦み、ぼんやりした疲れ、軽い頭痛、足もとの寒さ。それは他人からは分からない。私だけが感じ取れることだ。

5　しかし、そうだとすると、「内界はどこ？」と尋ねたのと全く逆のことを尋ねたくなりはしないだろうか。「じゃあ、外界はどこにあるんだ。」――机の上にコーヒーカップがある。でもそれは私が見ているものだ。コーヒーの苦みのように、コーヒーカップがこのように見えているということも、私の意識ではないか。そうなると、なんでもかんでも私の意識に現れた姿だということになってくる。窓を開けて風を感じるのも、遠くにうっすらと山並みが見えているのも、さまざまな物音が聞こえるのも、全部私が意識したことであって、私が意識していないことというのは、あたりまえだが、私はそんなものは意識していないのである。

6　私は意識の内に閉じ込められる。外界が姿を消す。同時に、これらは全て「私の内なる意識」なわけだから、「他人の内なる意識」も姿を消してしまう。他人が味わっている感覚は私には味わえないし、仮に同じ方向を向いて同じものを見ていたとしても、私と他人の意識は別物で、私はただ私の意識の内にいるしかない。私は私の意識の内に自閉し、私の意識の外にある外界と他我が完全に消え去ることになる。

7　しかしそれはどうもなんだかあれである。外界と他我などないのだと言って済ますわけにもいかんだろう。健全にもそう思う人、しかし同時に、全ては私の意識の世界だということに強い共感を示す人、そんな人が抱え込んだ問題、それが「他我問題」であり、「外界問題」だったのである。

8　こうして、哲学の暗く長いトンネルに入る。いや、トンネルと言うべきではないだろう。私の考えが正しければ、これはトンネルではない。それは出口を持たない。ただの洞窟にすぎない。それは見通し悪く曲がり、幾つもの枝道を持つため、いかにも向こうに抜けられるように人を期待させる。何人もの哲学者たちがそうして倒れていった。だが、もういいだろう。自分の意識に閉じ籠もりつつ、外界と他我とを復活させることは不可能である。これは出口なしの穴ぼこであり、トンネルではなかったのだ。我々はただ、入ってきた入り口から出ていくしかない。

9　穴から出て、もっと明るい開けたところに立とう。それはつまり、もといたところである。世界があり、意識を持った私と意識を持った他人たちがいる。そして、もう「全ては私の意識だ。」と言わなくてもよいようなかたちで、「意識」という概念を捉え直していかなければならない。それはそれで、困難な道である。しかし少なくとも袋小路の作業ではなく、もっと堅気の仕事になるだろう。

10　ところが、そうして他我問題と外界問題をなんとか清算したつもりになっていた私の前に、全く別のかたちで新しい他我問題と外界問題が現れてきたのである。私はそれを旧来の問題から区別して、「他者性の問題」と「実在性の問題」と呼びたい。

11　結局「内と外」という比喩からどうにも抜け出ることができないでいると言えばそれまでなのだが、今度は意識の内と外ではない。「言語の内と外」である。我々は言語を用いて何事かを語る。それゆえ、「言語の外」というのは、「語りえぬもの」でしかない。そこで一つの単純な態度は、「語りえぬものは存在しない。全ては語りうる。」と主張することだろう。つまり、「言語の外」を拒否すること。だが、それはやはりあんまり単純すぎる。そこで「こっちには語りうるもの。あっちには語りえぬもの。」と両方を認めたくなる。しかし、それで済ませてしまうのもやっぱり単純すぎるのだ。

12　どうも私には、日常のコミュニケーションからして、この言語の内と外を行き来しているもののように思える。一つの共有された言語のもとでコミュニケーションが成立しているというのは素朴な幻想であり、極端に言えば、人数分の異なる言語に分裂してしまったバベルの塔のような状況なのではないか。私は私の言語の外に向けて話しかけ、そして私の言語の外からの声を聞いているのではないか。

13　私は、今、私が話しているこの日本語を何よりもまず周囲の大人たちから学んできた。それゆえ、私の言葉は私だけの独自の言語ではありえず、周囲の大人たちと一致することを目指された基本的に公共的な、いわば外に開かれた言語でなければならなかった。ところが、ある人の用いる言葉の意味というのは、その人がどういう経験をしてきたかということに影響されずにはおれないのだ。言葉を完全に共有したままで、人生経験だけが個人ごとに多様化していくということはありえない。人生の分だけ言語がある。言語は公共的な生まれを持ちつつも個人のもとに発散していくのである。例えば分かりやすい例は「愛」という語の意味だろう。経験してきた愛のかたちが異なれば、それによってどのような愛のかたちが「愛」という概念の典型例になるのかという理解も異なる。そうして「愛」という言葉の意味も異なってくる。「コーヒーカップ」であれ「猫」であれ、「食べる」であれ「走る」であれ、あらゆる言葉が同様ではないだろうか。

14　とすれば、私の言葉の意味と他者の言葉の意味は多かれ少なかれズレを生じているだろう。他者はコミュニケーションにおいて私と異なる意味の発信源となる。ここに、意識の他者性とは違う、「意味の他者性」が現れる。他者は、意識における他我ではなく、意味の他者として私を取り巻く。例えば哲学などはあからさまにそのような声として現れてくる。理解しきれない、しかし全く理解を拒むわけでもない、「さあ、理解してごらん。」という誘惑のざわめき、それが意味の他者なのだ。

15　同じような誘惑の声を、私は実在のもとに聞く。このコーヒーの味わいも、あるいは先週の山歩きの時のさまざまなことも、言葉で表現し尽くすことはできない。しかし、それらは語りえぬものとして言語の向こう側に鎮座しているわけではない。「さあ、語りだしてごらん。」そんな誘惑がかすかに、あるいは声高に、響いている。私はここにこそ、「実在性」のありかを見たい。

16　今は理解できない。今は語りだせない。しかし、それらを理解し、語りだすために、私は私自身の手持ちの言葉を変え、私自身を変えていくだろう。そうすれば、きっとそれらと出会うことができる。そんな予感。他者と実在のそんな誘惑の響きを、私は捉えてみたいのだ。それが、私の「他者性の問題」であり、「実在性の問題」である。

（野矢茂樹『他者の声実在の声』）

問　問題文と次の文章Aとにおいて、それぞれの筆者は「言語」に対してどのように考えているか。共通点を説明せよ。

文章A

「どうしてあの人はいくら言ってもわかってもらえないんだろう？」

「あれほど確認したのに、なぜ伝わらなかったんだろう？」

日常におけるコミュニケーション は、理不尽さの宝庫と言ってよいでしょう。人里離れてネットもつながらない状況で一人で自給自足の生活をしていない限り、私たちはコミュニケーションを避けて通るわけにはいきません。そこから来るストレスや、結果としての「無駄な努力」も半端な量ではありません。

『コミュニケーションにおける最大の問題は、それが達成されたという幻想である』

これはアイルランド生まれの劇作家、ジョージ・バーナードショーの言葉です。これほどコミュニケーションの本質をとらえた言葉はないと言えるでしょう。そもそもコミュニケーションなどというものは「幻想」なのです。「そんなことはない。つい先日も職場の〇〇さんと、お互いの目指す方向がぴったり一致していると意気投合したところだ」といった反論があるかもしれません。職場の同僚でも、クラブ活動の先輩後輩でも、あるいは家族同士でも、「ツー・カー」で心が通じ合っている人がいる、と思っている人は少なくないかもしれません。

ただ、よく考えてみてください。そもそも相手の思っていることが自分の考えと一致しているということを、どうやって証明するのでしょうか？

「そんなの簡単だ。この前も同期の仲間たちと『あの本は面白い！』って見事に見解が一致したんだから」という反論があるでしょうか？

でも、この「面白い」という表現、あまりに曖昧ではないでしょうか？それこそ人の数だけ、その意味は存在するはずです。「面白い」を「感動した」「眠れなくなった」「自分の考えと一致した」などとどんな言葉に置き換えたところで、同じです。コミュニケーションにおいて、「伝える」と「伝わる」の間に大きなギャップがあり、伝えたからといって伝わったとは思うな…とはよく言われることですが、そもそも、「伝わる」という状態の定義そのものが曖昧であり、その状態自体が相当あやしいものなのです。

だからコミュケーションには意味がない、というわけではありません。だからこそコミュニケーションが重要なのです。

このようにコミュニケーションというのは、所詮は幻想でしかありません。「自分は他人のことをわかっている」という大きな勘違いと「でも他人はちっとも自分のことなんかわかっちゃいない」というさらに大きな誤解が、「常にわかっているのは自分で、わかっていないのは相手である」というコミュニケーションの非対称性を生み出し、これが永遠の「無理」へとつながっていくのです。

そもそも相手に自分のことを理解してもらおうなどというのが無理な話ですし、自分が相手のことを理解しようなんていうのも無理な話なのです。でも「だからコミュニケーションなんてなんの意味もない」のではなく、だからこそ少しでもその幻想を前向きに利用して、「気持ちの良い幻想」に変えていく必要があるのです。「わかっている」が起点ではなく「わかっていない」を起点にすれば、「少しでもわかった気分になる」ことでプラスに考えられるようになります。

（細谷功『無理の構造』）

〔言語文化〕

B　読むこと（1）イ　作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。

解答例　自分と他者の使う言葉は同じでも、考えていることや言葉に込める意味は人によって異なり、ズレが生じるという点で共通している。